「痴呆を生きるということ」を読んで

人は誰も、歳と共に記憶力に自信がなくなる。かくいう私も最近はしかり。その延長に痴呆老人の問題があるのかなあ。マスコミ等で痴呆老人の介護の大変さはよく見聞きするが、私は常々、痴呆とは当人から見て、どういうことかを知りたいと思っていた。そうした矢先に書店で、「痴呆を生きるということ」を目にし、待ってましたとばかり読破した。

著者はＤｒであり、老人保健施設の施設長をされた経験のある方だけに、たくさんの事例を交えて痴呆の主症状としての「喪失感」、「（もの盗られ）妄想」、「徘徊」等を、当人側のこころの視点から解説している。また、痴呆に伴う行動は、老齢に伴う「喪失感と攻撃性、依存欲求と依存拒否という両価感情に翻弄されている」と観、また、「痴呆を病むとは、さまざまなギャップに気づき、それを乗り越え、修正する力を喪うということ」と観ているようである。それ故か、「痴呆という病が徐々に生きるエネルギーを殺いでいくという事実そこが痴呆ケアのもっとも困難な課題」という。

痴呆問題の多くは、周り（主に世話する家族）への「攻撃性」、「依存拒否」がもたらす日常の言動が問題にされがちだが、援助者には、まずは「喪失感」に寄り添うこと、「依存欲求」を読みとることが大切で、老人が「身の丈相応」に「今・ここを精一杯に生き始める」援助（介護）への大切さを説いているようである。また、痴呆故の行動は、老人に共通する「一つの事象ではなく、基盤にある病体も異なり、至る道筋も異なり、こころのありかも違う。それら異なりを解った上で、対応を考える」必要性を説いている。「『ただ、ともにある』という感覚が生まれ、ともに過ごしてきた時の重なりが理解を超える」とも説く。著者は最後に、「ぼけてもこころは生きている。ぼけても安心して暮らせる社会を」という言葉が、自分の言いたかったほとんど全てであるという。

痴呆そのものを理解したいという私の第一歩としては、最適の本であった。「喪うものもほとんどなく、常に人に甘え、自分には今しかない」と日頃呟いている私は、さて、痴呆を病むのかどうか。もしそうなれば、どういう心境の日々かを報告したいが、痴呆を病めば「報告する」との約束も忘れるだろうから、どうしようもないか…。まあ、その時は私を材料にして、痴呆老人のこころの様の一端を誰か説いてくださいね。

（2004 年 03 月 06 日　記）